

藩鑑

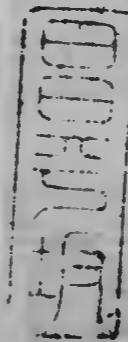
立花

百三十



庫文閣内	
五九函一	三四元八
梨	冊
	和書

内閣文庫	
番號	和 34682
冊數	278 (130)
函號	159 1



187

藩鑑卷之二百二十九目錄

九部十五

立花伯耆守源鑑連

藩鑑卷之二百二十九

立花伯耆守源監連

一 天正十年十月六日秋月種實と歎ひ
しとき道雪ハ宗茂のちこりき常
あつさるありさまを見届け戦人の後
ハ無雙の名將と云ふと推察し養
子にも〜と望まれ〜とも

紹運さまの許容ありルを道一雪
き祓て申されけり我壮年此初
より今七十有餘あるまで朝暮若
我辛勤して多くの敵を打靡し
壁を破り税ありをとりひくとい
へども大友の衰運もや徳徳の負ても
猶暮り味方の勝ても日々に衰ふち
くハ鶴津龍造寺遠くハ毛利世等の

大敵の外此小敵の筆ふるに違おし我
年老し多事なれハ死期たちきよ
あり我死して後誰ハ此邊と心を合せ
大友家を助くハ此邊ハいまハ壮年
よて男子二人ハ此ハ是非宗義をハ我
小賜をり立花の家をお償させ我死後
にありても此邊と心を一にハ國家
を治めしるハ金く我家の為をたも

ふにあらすといふあれは紹運も當院
此理も腹して懸一かしくさうまた
羅忠之の嫡子あれとも遣はすしと
約しつゝ道雪大は脱ひ原尻宮内を
括載る紹運より世戸口十兵衛太田之他
二人此者をお添て立花へ送られ
道雪の家長をむつといひ其状の事と
斜ありす則ち立花家の重忠残り

あく附属し上下さめき脱立花家
軍物語

一戸次道雪高橋紹運は去年より筑後
三井郡に左陣して四方の敵と攻合
率幾度と小敵を知らしむ日道
雪紹運豊後小太助元宗舎し
不尔去月廿九日隆信有る母を討
死のよし聞えり若是は虚説ある
一とありし合けり小道雪の十河田を破

入及玄如とりし者差出てかりきり此事
實正ある一—正放の昨日早晚の如く
境目おどりに出て山(川向の肥後
俄子色めき立旗色ありく志とるに
ありてお入て小定めて其防此事告
来りゆやらへ今こそ思ひあつて小
とを中けり各歌味方の事あれは悦
ふふもありありと大物をやと惜む

人も多かりけり其うち道雪隆伝
討れお島津いよ蜂起して九州

管領の望多(手々と宣ひけり

九州始
乱記

一九州大い蜂起して近年の探題大友
く下知子肯く人多く中には秋月三
郎種實ハ彼旗トりあつ謀叛し
て大友家と合戦此事一度あり
秋月方より長尾城に軍兵数千を籠

是大友家を窺ひければ大友宗麟の
方より彼城の柵として石松源部
定光といふ者を並しりしに石松の
方より長尾城近邊を焼拂ひまじり
戸次道雪に對面して軍評定せん
と立花城にゆきしよりけり道雪別ち
對面して宗麟に仕置等委細な物
語を傳へて後道雪中けり内近飛

脚を以て宗麟の跡の事を中さ
と存せり折角石松茂の入来を悦
入りて出某の事をも語りし中
は是ハ一と覺え強ひて大友家老臣
子演説ある下と申は是ハ口上にも
中と申は是とも若事多くしつゝ
失念仕方事も山に是ハ口上の如く
書仕しとして筆を執て一つ書ゆ

したりけり其詞に舊而冬生葉表
より冬空しく引帰られぬ以後ハ
融ハ勝ニ余味方ハ氣を失ひ心替り
仕る人國中より多くして此表難儀
よ及ふ立花の城寶満城を始とし
て岩屋木山等此城を包難く此
に苟も道雪入道志を勵みて宮橋
紹運に心を合をせ秋月々大難と亦

にを以て度々合戦仕り味方此小難を
以て毎度勝利を均漸く城を括
してし此内味方を此救をくハ大友
家此より矢ハ長く廢ましり人間當年
ハ追付此進後ありて秋月家と有無
此市一戦ある一と度々併せりさ
るよ依て味方此軍も安堵の思ひを
あしめて軍忠を勵し今日こと相

待し爰に既し十一月迄下旬まで休
まじしもの故に沙汰にも及ばず何
事一通りも見えず存せざる事
田原親實の不義顯赫しるに依て
急度引退治あるべしと評定極
る由に当地の直知事引のり
去る亦七日直書を賜はり警入存
出に極端心許なく存るに依り脚

力ををせて委細を兼らり候と存る
知小幸に石松源五郎兼りて荒増
の物語を承りて畢み誠に宏文此
中事に出得とも浦部永く大友家
に此手に餘らんは後代の詠尚時
の証尋何事々是小志く事傳んや
愚老々事八年迫り熱傾きて出候
末期遠く候と存る事不依て上を

も憚りし面を此怒をも顧みず胸
中此存念を中進し山一一言を残
す 以上達 ありく 筆 中古日本
治亂記

一 天正十二年八月道雪紹運 馬本を打
通らるより 龍紫秋月 星野潤注不
孝腹に聞え通をまーとて方より
人数を出し 掛田人と云ふ元より
敵ハ案内者あれたるのつまりか

この難下攻詰り 旗炮をお裁り
に切取のあを茶にあて 大木を小
楯と取り 顔をかりをさし 出し 旗炮
をお者あり 志くも 上をに見え更
よあゝ玉もなく 名員あまゝあり 其
中にも 道雪公此 馬本を一人討倒
すに より 馬本をさし こと 露を 旗
より 道雪公 柳立腹より 憎き 奴系ら

亦あれを射し作らる位傍りの流の
る放しに亦けまとも顔をかりを
指し一珠炮を放し其間をかりの幸
あまハ中よりぬりあり道雪公出
せまふされ紹運先士も年毎の者ハ
おとしせぬるあれをおせ強とある其
時紹運公市川平名街と云者も作ら
らる畏てゆきとて珠炮を構へお待下ら

又彼木陰より顔をかりを差出し珠
炮を放さんと云ふ事平名街ハ元より
名利早先達者より先を越ておれ
ハ其玉眉間もや中りけんお橋の外に
贈ひ出うの依り成て依られハ諸人とも
ととて其公にけり 五花家之記

一 天正十二年八月十四日籠後出張のとき
道雪紹運五花岩屋を出て太宰府に

著陣を立花に子息を召監統
虎士大將より十時松津守國士薦腹
之河吉米多比ふ郎次郎を終て平
餘人を残し置石屋流留守居に
ハ屋山中勢に八百餘の勢を添て残
し置西家流軍勢五千餘人八月十
八日此夜半より左軍府を立て後
路をさして押進る詔運案内者を

れハ先陣と定む黒木道中ハ無双此
難不なれハ容易く通り難く
諸率も氣をそ屈しけり寶満流祥
定しけりハ今宵ハ左や右も半ハ過て
月も傾きけまハ河邊よりハ右明に及
ふし道もくハ敵中十餘里此率ハ
まハ敵中に凌ぎ吾方ハ幸如何存
山とて一同に詔運ハ中入られ道雪

一 中達を可成のよきあり物に推して
て中入りと撰むれば秋尾大守を兼
りける後陣より出るとも也詞を掛け何
事此用と云ふと云大守畏て右の趣
寶満の者共一同言上と中入りし
かばとて氣色を替へて云れけるハ
秋尾はあをれ秋中にてもあま此
道雪をとりおして通りへとまるところ

よ多り附敵あらハ格切よして
一きものをと方考りに罵りて棄物を
相、えられけり是ハ是に驚きて諸率
又お立ちり本より紹運先陣にて道
雪後陣をれば略次は軍法外儀勇
勇しく如何なる強敵大敵ありとも容
易く寄立しと見えさうけり同上
一 大友義隆入道宗麟は末年に及び

て武威衰へ近隣に旗本皆下知し
従はる碓津に強勇に帰服を乞を
徳八とし強も宗麟の名に及び
しこいし依り関白殿下を頼み奉らん
と上洛を催さる依り探題職を
嫡子義統に譲り終り宗麟の道號
を宗滴と改め天正十二年二月小上り
終り卯月五日大坂へ出仕あり関白殿

此氣色勝れし徳おをりまゝ種も祀を
あり日を経て後市販下されし國姓と
き九別分國姓此仕置等を作分りる
其時此國分けに八豊前豊後筑後
三藩國の大友支配として諸城主を
下知せし一々大隅薩摩の碓津支配
碓前ハ亦公領に召置れり橋本運立花
道雪等支配せしと作出されたり

是より九別所小城思ひに大友に對し

謀叛し勝津も跡駈り出さず立休齋

聞記

一 戸次伯耆守濫連入道巨雪大友將也

の後あり大友討耐重秀戸次氏家を起

し豊前守貞直丹後守時頼道雪にあり

て武名を顯しそのあり大友宗麟道

雪諫を拒て玄花の城小居せしむ宗

麟日別改軍の後諸侯皆討て只筑

前一州の之道雪敵と居せしむ城を

堅く守り難送る隆信神代長良曲

淵房資をしり江上家種と會し西

筑前を征すしむ原田上総助先陣し

り此れ松原に進む道雪敵を合て系

田を逐て高祖の城を攻む神代曲淵

是を救ふ道雪利ありて退く

荒平の城名糧を道雪討つ道雪服

山邊より出張ありて糧運送の跡を尋
固より隆信立花の城を攻んと欲す
道雪紹運たぐひに救ふ事を得ず
只豊後の軍を待つの宗麟傍津氏
と救ひて勝す自國安んず何ぞ
他國より及ぶけんや是に於て道雪
和議を立花岩倉直城不領外皆
隆信に属す隆信許諾す道雪酒肴

を博多に贈りて隆信の平均を望す

龍造寺記

一 道伯振宗茂 由尋宗茂 ありて此の序に座あり
して由尋ありて私儀も最も立花
の市名も字名紫もやうに仰せられし
入りのて由尋より座ありて立花に改
められし儀ありて承知侍り居座存心
られしより仰せられし宗茂振野意に

殊亦長くむつゝき事なりさうか
うい大辨立花大近乃監濫倭を道
雪振市討成されし事い定めて聞及
久しく濫倭代に立花の城主より大友
の嫡流あり昔に立花を西大友と申
しうよしよ義教將軍より立花大友
入道と是あふ山本兼山以後大友を改
め立花を用ひし中い大友家より古今

と云に一門はうちよ立花の家より上越
も仁是をく濫倭はかても大友家
のあしらひ中い重き事よ山本と云
濫倭重し悪逆も是あふしゆ(滅亡)
い濫倭子神六郎流浪体り出で道
雪振市討成されし事い定めて聞及
久しく濫倭代に立花の城主より大友
の嫡流あり昔に立花を西大友と申
しうよしよ義教將軍より立花大友
入道と是あふ山本兼山以後大友を改
め立花を用ひし中い大友家より古今

しよても安堵仕度山道雪櫃を少くも
眼の中へ心是かく山道雪櫃を以て望
の通り知行安堵の儀おのちひやは
すゆたへ何方よ新在ゆとも大友度より
申権ひかくゆやうよ山道雪櫃より
やうよと頼い中へゆのき道雪櫃より
大友度へ御達せしれゆ要よ赦免是
かく山を種々御達せし是任前の安堵

をくりおのちひ中へ其後道雪櫃より大友
度へ立花氏名跡ハ大友氏嫡孫として
代々忠節其物おくゆ徳る前に新五郎
不義下つき山先代より山先代おされゆ今
度山後たまたま立花の家を起しゆ
とも又重々此不義よ付て討果されゆ
山後元来立花の家来筋の者れ子
よて此山筋目も徳をす不義あるも

道理より立花の名跡断絶の所は前
代より歎き思はれしつゝ濫後にも
仰付られ今とても断絶の所は歎き思
はれし由にてかたをさう儀より道雪振
元来戸次は名字も名も續あされし初
もお違ふく縁連し名讓あされし由も
ハ立花は名字も名も續あされし初
花は在城にされ度より名望あす

山越大友より頼と名懸是をく山とも
大形無理に名望おかたをさし物まとも
雪振より後より立花の在城をうりより立
花といふ名も續あされし由も宗茂振より立花
名も續あされし由もやうふとの名も續あす
後子神五郎道雪振より名も續あす
く存し立花の名字も續あされし由も
御小世上あす況ひよ山より中より立花

先祖より傳来の品を道雪極進
中ふれぬ綸旨院宣將軍家正教書無付
此扇旗吉光の服を彼是數多是あり
皆焼失して扇脇旗をとりお返し
此語おされぬ 公程閑暇雜書

一天正十二年大友宗麟猫尾城を圍て數
十日攻れとも落す大友は公長陣を氣
留れとりと云花道雪言橋銀運聞て

宗麟に馳加り籠る一とお謀り俄
子名を出し二書に腰を糧を付と陣
觸して八月十八日お立しり士率一是ハ
何方へ向をもとるやと怪にあり下知後
ひて之笠那のうち山江系へお上る是よ
り黒木流猫尾へ押行しりしと知し
銀運先陣より今宵は左や表半邊
より月も傾ぬ籠後川のほとりお表

ハ明かん徳ハ敵の中数十里押通
る事いふあふんと御運使從士言け
れハ道雪に期ト云送り多ク道雪
を之あをれ早く御使明けよ
晴して敵出ハ極切にして押通
とて棄物をたらけハ使者に御
る新尾大守よりあふ候を
よ逢ひとて馳歸る 常山紀談

一 五花道雪ハ龍造寺隆信討死の
聞流を押し我大友は國家彼隆
信に對して軍を交わす事年々
平日軍術を志まらば彼れ隣邦
在テ透穿をかきあふ今隆信
死ハひりとして我軍武佐を
ハ國家滅せし事一怒ハあふ
云けハ穢ハ道雪ハ老功の人なり

子老猫死むる時ハ舊巢流を流す
とハ真子斯の如くあま〜と皆之を
感〜けり九列記

一天正十三年道雪紹運ハ黒木の城を攻
人と支旗を以て赤圍に攻め敵一千
餘人捕籠りて是を防ぐと以て
も道雪紹運強く攻め入り依り城
破れ黒木倉庫討れ訖ぬ隆信是

木ハ後信のためハ江上三郎ハ五千餘
騎を付て籠後の福徳ハ橋出り道雪
少〜も怒れ是同國ト妻山門の郡ハ
赤出〜か〜こを放火〜高良山に
赤上りて陣を張り籠此紫字陣江上
流軍勢道雪と合戦す幸一度〜
及ふ大友ハ宗徳ハ勢敵の大勢あり
を見て次第に籠失せ道雪紹運ハ

勢をくわしそ残りしる
公程閑暇雜書
立舟齋聞記

一 天正十三年乙酉春夏、道雪紹運、
連良寛、在事、豊後、筑前、入られ、
て、何を待ともかく、高良山に在陣、
処に、籠紫、籠造、寺云、合せて、高良山、
を、いて、陣、掛り、作り、山、内、家、の、元、寇、合
せ、退、散、し、久、留、米、の、城、に、退、入、す、筑、後
川、に、退、漫、す、就、中、籠、紫、家、に、日、此

大将山内玄庫、筑前、高良、解、由、を、討、捕、す、
外、歴、の、者、二、三、百、人、討、取、り、高、良、山、を、引
合、ら、り、切、る、後、に、敵、も、近、付、を、徒、り、日、を
送、ら、れ、山、を、れ、し、河、邊、に、陣、村、に、在、陣、暫
あ、ま、し、し、と、道、雪、公、の、天、神、社、壇、に、在、
移、あ、ま、し、れ、し、紹、運、公、の、赤、司、村、に、御、陣、を、移
ら、れ、し、処、に、道、雪、公、在、煩、身、既、に、命、も、危
く、見、え、奉、り、し、し、に、在、遺、云、し、我、死、す、

ハ禮魂を著せ好見岳ハ柳川の方に
向ハ極埋む（ま）のよハ作せ置れと
ハ昔お肯くたをいてハ悪靈をか
らせしま家老とも子ハ孫ハ取殺さ
る（す）らハ烈（れつ）ハ（ま）復（ふ）ハ酉九月
十一日七十二歳ハ（た）て終（は）た（る）ハ成
臨（りん）ハ（ま）立花家之記

一 戸次伯耆入道道雪ハ日以病ハ（ま）り

ハ和陸福崎並茂をたえり出ハ十死
一生の軍を挑て討捕ハ（ま）り利を
得たハ力及たハ病ハ（ま）りを期す（ま）
を（ま）ハ討死（ま）ハ（ま）とたまハ定め言良
山陣を敷ハ瀨方ハ進み一騎
當ハ此名を勝りわさとハ小瀬ハ七
百餘騎ハ後陣備を堅ハ（ま）り謀を
ふハ人ハ直後ハ候を立中遣ハ（ま）り

ハ當家龜造寺と陣を對せりこと
年久しく云革の弊系民のうまひ是
に過しきハあつて一徳る道雪若方
と一戦をお桃の雌雄を立而し決して
諸人其苦みを授けり一徳は只
今瀬高口へ出張中一徳は合出の
しき一戦中一徳と中遣を一徳
直長ハ此時柳川の城にたれり

きハ道雪と一軍してお散り退
く一徳と作せられ先久納佐助を
遣はされり佐助馳返りて道雪
軍は僅七八百に過せし中云
下れ則ち柳川の城をお出られ井
橋に陣を居られ此戦より一
と成りて一徳は倉町大隅を伝書
水地丹後守信定大なる喧嘩を
傳へ

て己よ孫事よ及んると陣中甚
く騷動して陣亂走して乃公道雪
との軍お叶をれす柳川城城入
返りありけり道雪牙を嚙て殊念
ふたもひくも力なく又無勢か
れいつきて柳川をも攻る事ある
を守り高良山引返りけり道雪
良山返りて後諸士をあつめて談

しけり天晴禍勝ハ智仁勇徳大将
カ我多年流馬肺肝をくつき教
度の軍をお桃之謀れとも謀らば
運を天よ任せ時を納んとす道とも
禍勝ハ若く健あり此道雪ハ老て病
身ありハ情なき仕合ありと首を垂
て悔みけり其弟日々に積り九月
十一日籠後國高良山陣中に入り

死去しけり御年六十九歳あり世入
道ハ文といひ武といひ廉直賢方正
大將めて大友宗麟の家を立しき
の道雪リ世は秀しき由しと見え公
も道雪リ死しけりと聞石山に旅後あり
れ亦惜にありけり

今度倉所水腫と喧嘩を仕出さる
幸ハ公今日此軍を留め奉らん

ためあり彼大隅の老功此者も
道雪ハ必死にたもひ定めしを意
り水腫丹後守小旗合しわさし
喧嘩を仕出さる公此一戦を妨
り最前柳川に城中より一往
しめ申す事しき道雪ハ使を得か
くさるあらんも云甲斐あり似
しうと仰せられ亦おしきけり

ゆゑに及たきて供ひとて今又喧嘩を仕出さし軍を留めしけり後小直茂聞えされたまひし賞あされ大隅守ハ分別よのありと折折り出せしありけり 之徳禪

一 由布美他中ささるハ濫連招法辨のときハ屋形より宗麟の麟の字を遣たされし乃其用あさるハすよしに

つき、麟伯振と申し其後阪之豊後
の沙汰あしくお取りしよつき中国
より此禪僧小直達あされ次分ハ
爲し傾れ少少しも義を尙られ
此他畧あされ度思召し上ハ名も
さやうの公あるを其用ひあされ
思召しとの由意あり禪僧中よハ
さやうに思召れしを道雪と改め

され徳ろしく山道に降りしう雪ハ
道より滑中ゆり義を省しよあき
るにたかひ中しきよし中上ゆし
つき道雪板と中たあり

梅岳山し中上奉るハ亦死骸を立花

山より丑寅子あきり梅々岳し中

山子納め奉りゆゆあり公程閑暇雜書

一 道雪板武田信玄より名譽此也

らきを際及たれ亦對面を度との書
此是あり是ハ編糸僧持糸あり道
雪板亦他具此路に持糸仕るあり今
亦是あり山同上

藩鑑卷之二百三十目錄

大部十六

立花飛驒守源宗茂